

# 久留米の自然

2008年4月1日  
第100号  
記念号



Since 1972

写真説明

左：高良山の山並み  
中央：水辺の自然観察会より  
右：春の野草を愉しむ会より

## 里山と里川の自然を保全保護しましょう

会長 橋田 沙弓

私たちの会は1972年結成以来、4つの柱によって支えられてきました。久留米郷土研究会、久留米昆虫研究会、日本野鳥の会筑後支部、久留米野草の会それに、現在は環境部門が加わっています。会報「久留米の自然」が2008年4月発行で100号を迎えます。それは会員の皆様の厚い支援でここまでこれたのです。また、私たちは35周年記念として「ひとつの川から見えるもの」という環境教育読本を多くの皆様・スタッフのお陰で出版することができました。本当に感謝申し上げます。

久留米市内を流れる全長 11.6 kmという高良川にこんなにも自然環境が残っていたことは驚異です。この川の水源地には耳納山地という里山があり、この里山を人為的に汚染することは里川の水質も汚染されることです。私たちは自然と人間と野生生物との共存共栄を望んでいま

す。その為にはどうすればよいのか。この野生の生物たちを私たちの五感をもってよく見る。深く知ることです。そこに「センス・オブ・ワンダー」の心が必要です。この野生の生物たちがどのように進化の過程で分化し、発達したのかを学ぶべきです。それこそが「Study is Nature」といえるでしょう。そのために私たちの会は自然観察を大切にしています。地球温暖化が進むこの地球で、四季おりおりの地球環境とそれに適応して生きる生物たちから教えられるのです。

久留米の自然を守る会は「グローバル・アクト」、地域のことも考え、多く子どもたちに喜ばれる会に成長し続けたいと願っています。里山を残し、里川を愛する私たちの会を、これからもご協力いただきますようお願いいたします。

## 特別寄稿

## 思い出

## 名誉顧問 丹部 竹志

突然、秋吉さんと云う未知の人が家にやって来た。破壊の進む高良山について、有志が集まって話し合いたいという。

数日後西鉄近くのうどん屋に集まったのは福岡歯科大教授の江口先生、昆虫の梅野さん、鳥類の小林さん、郷土史の古賀さん、植物の私、世話人の秋吉さんの6人だった。

高良山の植物を追っていた江口先生が中心である。話は喧嘩がくがく市の高良山対策に非難が集中した。その結果結成されたのが「高良山を護る市民の会」である。

会長就任後間もなく江口会長が亡くなられ、梅野会長の時期に会報「高良の自然」の発行が始まった。梅野氏は名家で市長とも対等に話の出来る方だった。当時すでに耳納林道は着手しており、当時の自衛隊の訓練をかねて着々と進められていた。

草野田主丸は林業と果実で山を利用していたが、とっかかりの高良山だけは神の山として自然がいっぱい残っていた。特にシダの山として全国的に有名で、当時の明善中学のシダの研究は全国に知られていた。

私も明善卒の方やシダ専門の方と山を何度か歩いたが、それは素晴らしいものだった。コウラカナワラビをはじめ全国でも稀なシダを御案内願ったものである。現会長の橋田さん、野鳥の松藤さん等はこの頃からお手伝い下さった。

毎週誰かが山に登り、何があると幹事会に報告した。

森林公園については以前から計画されて、すでに着工していたので私達は時々現場に行つて意見や部分変更を求めるにとどまった。

然し次の拡大計画には断乎反対した。高良山横の谷に鉄橋を二つもかけ公園も10倍以上広大なものにするに云うのである。

相手は市だけでなく県もタッチしていた。悪

戦苦闘数ヶ月、社会情勢も見方して取り止めをから取った。

当時新聞社はおおむね我々の味方で週に一回ぐらい高良山が記事になった。記者達とも結構仲が良く、社に行つても街で会つても「何かありませんか」と声をかけていた。

市との闘いに日々を送る中、梅野先生が死去された。守る会は一時中断していたが、あまりの市の乱行に再生した。

「久留米の自然を守る会」小林先生を会長に再び発足してゴミ捨て場対策にのり出したが、結局市に押し切られてしまった。

50年程前まで国有林だった高良山を10億余の金で市が買い取つて、その穴埋めのため財産木と呼ばれる樹木を八割以上伐採し、林道を使つて売却した。神社もまた寂源林と呼ばれる数人で抱える程の大木を数10本業者に利益を吸い取られながら伐採した。その金で神社前に結婚式場として高良会館を建てた。それがどうなったか皆さん御存知の通りである。動植物の宝庫高良山は変わってしまった。あの夜うどん屋に集まった6人の中で私一人が二年前脳梗塞におかされながらも生き残っている。50年前の高良山そして神社の出来る前の千数百年前の高良山、そんなものを夢みている。



高良山遠景

**100号記念 おめでとうございます。****前会長 松富士 将和**

久留米の自然を守る会の会報・「久留米の自然」の100号記念、おめでとうございます。

この原稿を書くにあたり、「自然と共に・久留米の自然を守る会 30年の歩み」を改めて見直した。前身の高良山を護る市民の会の発足が1972(S47)年8月、久留米の自然を守る会の発足が1977(S52)年3月と、もう30数年前のことになる。NPO活動のさきがけとなる、すごく、永い歴史があるのだ。

設立時の江口二郎初代会長、梅野明副会長(2代目会長)、小林実副会長(3代目会長)、古賀幸雄副会長、秋吉満事務局長は既に故人となられ、いま残っているのは久留米野草の会の創立者である丹部竹志さんと、現会長の橋田さん、それに私の3人だけである。当時は若く、青年部長であった私も、橋田さんも、設立当時の会長、副会長の年齢をとうに越している。気持だけは若いつもりでがんばっているが「体が付いてこん」になりつつある。

さて、この自然を守ることを「30数年続けてきたこと」もすごい、実に先駆的なことをいくつか始めている。その斬新さとパワーについて、時系列的に、「高良の自然」「久留米の自然」を通してそれらを紹介したい。

「高良の自然」創刊号は1972(S47)年11月15日、事務局の秋吉さん宅で遅くまで編集・発送に追われたものであった。第1回親子凧揚げ大会を1973(S48)年1月14日高良山森林公園(我々は切株公園と呼んでいた)で行い、第1回野草を食べる会を同年3月11日、第1回観月会を10月12日に始めた。

「久留米の自然」創刊号は1980(S55)年2月、事務局は私のところで、「久留米の自然」の文字も私が下手な字で書いた。(第13号からは小林前々会長筆となり現在に至る)

1982(S57)年7月には久留米市観光課と共に高良山自然歩道ガイドを刊行した。これは久

留米でベストセラーになり、すぐに増刷となった。

1983(S58)年3月6日には作家の(故)松下竜一さんと呼んで10周年記念講演会を行った。香月徳男さんの藁屋根の自宅・香櫨亭に泊まって頂いた松下さんとの語らいは今も深く心に残っている。この年の11月27日には第1回ハゼ祭り・シンポジウムを行った。今の柳坂のハゼ祭りの前身となるものである。全くの手づくりで、ハゼのスケッチに、短歌、俳句、川柳を募集した。出店も婦人会にお願いして数店の出品だけであったが、今の賑わいを見ると、嬉しいやら観光化過ぎて騒がしすぎるやらで、複雑な心境である。

このように実に様々な先駆的・斬新な活動は、凧揚げとハゼ祭りを除き今も続いている。

「久留米の自然」が、今後更に150号、200号と続くことを願いながら本を閉じる。

**少年時代の追憶 ー清らかな自然ー****吉田 哲磨**

私が生まれ育ったのは、三井郡大刀洗町(旧大堰村)で筑後川北岸の片田舎である。したがって、私達の幼い頃は、山は青く水は清い全く清純な佇まいそのものであった。

春ともなると小川の水が温み、ヒキガエルの産卵を観ることができた。ひも状の袋の中に入るで念珠みたいにたくさんの卵が産み付けられていた。また、藻エビが透明な身体で、澄み切った小川を泳ぎ、私達はこれを宝物のように手で掬い取り、瓶に入れて見つめて時間のたつのも忘れていたものだった。

田植えが終わると夕涼みで、近所の人々と床に寝そべって眺めた、身も心も吸い込まれるような天の川、眺める事によって果てしない宇宙に少年時代の大きな夢を描いたものだ。

今は眺めようとしても観れない天の川、物の豊かさを求めた人の罪の深さを強く感じる。

**記念号によせて****久留米市荒木町 金子 周平  
(福岡県森林林業技術センター)**

各地の野山を歩いて、きのこ類の観察をしているうちに、意外と身近な所に珍しいきのこが例年生えることに気づきました。高良台演習場周辺の、アカマツやコナラ、シイ、カシ類の林の中で、特に梅雨時の晴れ間に、鮮やかな色や形の、テングタケやイグチの仲間がみられます。夫婦で楽しんでいるうちに、自然を守る会から久留米できのこ観察会をしたいというお話があり、この場所を皆さんで回ったら楽しいだろうということで、6月の最終日曜日に観察会が行われることになりました。何しろ梅雨の真ただ中、雨模様の日が多いのですが、たくさんの方が参加頂き、いろんなきのこが観察できます。やっと傘がみえるくらいの小さいものから、直径30cmほどもある大きなものまで、地味な灰色もあり緑や赤、黄色のかわいいきのこに、その場で歓声が上がることもあります。ただ残念なのは、食べられるきのこが少ないことですが、それはそれでけんかの種にもならず、和気あいあいでも楽しめると思います。

**古賀幸雄先生のこと****山口 淳**

古賀幸雄先生は、平成19年9月23日に永眠された。享年87歳であった。

先生のご功績は、今更挙げるまでも無く、久留米市史全13巻と共に、今後も記憶され、顕彰されていくだろう。

しかし、ご葬儀でご家族もおっしゃっていたことを敢えて、ここに書き留めておきたい。

それは、戦時中のことであるが、先生は大戦末期に陸軍士官として、戸畑の捕虜収容所員であった。そのために戦後、戦犯容疑を問われて極東軍事裁判に被告として立たれた。しかし、元捕虜は「古賀はジェントルマンであった」と証言し、事なきを得られたという。この話は、

私は直接先生からお伺いすることは無かったが、所長などは逃げ出してしまったので、自分があると始末をした、と仰っていたし、他から、先生は捕虜から英語を習っていた、とも聞いた。

仕事の上で、第一次世界大戦時の久留米俘虜収容所での「山本中尉」という人を知った。収容所員であったが、捕虜達と交わりドイツ語を習い、日本語を教えている。軍人として出世はしなかったが、戦後ドイツまで、友人となった捕虜を訪ねてもいる。どうしても古賀先生とダブってしまう。翻って中公新書の「アーロン収容所」読めば、捕虜としてその収容所で過ごした筆者の、イギリス及びその「民主主義」への不信と憤慨に満ちている。

収容所という閉鎖された、極限の世界での、相互を認め、理解しあう人の存在の大切さを深く感じる。

先生は「中央の歴史研究者に郷土のことを教えるのは、郷土史家の務め」とも仰っていた。ご教示を得るために、先生宅にお伺いするのは常となっていたが、先客、後客のあることも多く、中央の研究者に限らず誰にでも、常に分かりやすく、的確な、資料に基づくご教示であった。

仕事柄、過去の多くの郷土研究家の業績を知った。しかし、その人柄を知ることは少ない。先生のご業績と共に、お人柄の一端を遺したい思いで、拙い一文を呈した次第である。



草野町での歴史探訪

## はしのはなし

### 猪上 信義

最近こういう話をよく耳にします。割り箸は資源の無駄使いだから「マイ箸」を持参してエコ運動に協力していますとか、いや割り箸はスギやヒノキの端材から作り、資源を有効に使うのだからそういう批判には当たらないなどです。一見両方とも納得できる話のようですが、これには落とし穴があります。「マイ箸」派のあなたがプラスチックをお使いでしたら、それが石油製品であり、植物起源の割り箸よりも環境負荷が大きいということを、しかも使った後に洗う度に真水を使いそれを汚しているのです。一方、今日本で使われている割り箸は約260億膳でそのうち98%は輸入品で、その99%は中国のシナノキ、ヤマナラシ、シラカバなどから作られたものです。また量的にはわずかな国産のスギの割り箸も、端材ではなく樹が丸々使われています。

いわゆるエコロジーの話にはこの類の議論が多いようです。再生紙使用（純正パルプのほうが環境に負荷を与えないという意見もあります）、地球に優しい車（当然矛盾しています）、原発は炭酸ガスを出さない（途中で大量に出しているのに）……。キリがありませんので、これ以上触れません。

ここで私が言いたいのは、もし野外で箸を忘れたときに代わりに何がいいかということです。針葉樹は一般にヤニ臭いし、数ある広葉樹も手ごろな太さとまっすぐな枝はなかなか得にくいものです。太さは手ごろでもハクサギでは食べた気がしないでしょうし、ハゼノキやヤマウルシではあとが大変なことになります。若い枝が赤く照り輝くネジキにはヌリバシノキという方言があり、一見よさそうですが、これには弱い毒があります。ミツバウツギがいいと物の本にありますが、深山の谷沿いしか見られません。クリの木は正月のクリ箸に使うほどですから、もったいなくて切れません。私の経験からはネ

ザサなどの細い竹があればベストですが、ウラジロやコシダの茎も重宝です。使った枝は持ち帰らずにその近くに埋めておきます。これこそ究極のエコロジーです。

他愛もない箸の話でした。

## 高良川とぼく

### 篠山小学校4年 西 隆寛

ぼくは、昨年の夏休みの自由研究で、「高良川のきれいさと生き物の関係」というテーマで、実際に高良川の上流、中流、下流と筑後川との合流地点の生き物と水質調査を行いました。高良川には、カゲロウの幼虫、サワガニ、カワムツ、カワヨシノボリ、カワニナなど、いろいろな生き物がすんでいることがわかり、ますます高良川について、興味を持つようになりました。

今年の1月、母から筑後川新聞に「ひとつの川から見えるもの」の本があると聞き、読んでみたいと思いました。先日本がとどき、ぼくが知りたいと思っていたことが、とてもたくさんありました。また、高良川にはぼくがまだ知らない多くの生き物がいることがわかり、これからも自然が豊かな高良川でいてほしいと思いました。



水辺の自然観察会より

例会にはたくさんのお子もたちが参加しました

## 会報100号の歩みの中で

### 幹事 行徳 直久

#### 1. 会報誕生

会報「久留米の自然」第1号は1980年2月に発行されました。

その巻頭には“久留米の自然を守る会は、昭和47年8月高良山の緑を伐採から護るために発足した「高良山を護る市民の会」を母体として、昭和50年にその対象を広げ自然に親しみ自然にふれることにより、本当の市民運動としての自然保護運動の輪を広げてきました。”とあります。さらに、梅野明会長は、「環境保全に立脚した街づくりを」と、小林実副会長は、「三猿は良く見、良く聞き、良く話す」、古賀幸雄副会長は「将来の都市農村生活の建設は、住民の要求と発想に根ざすものでなければならない」、丹部竹志副会長は「はてしなき欲望へのブレーキと澄みきった理性の回復、それこそが自然保護の原点である」と、それぞれ言葉は違いますが、1980年代の新しい住民本位の運動の確立をめざして頑張ろうという決意とアピールを発しておられます。

#### 2. 構成団体

当初は、久留米昆虫同好会、久留米野草の会、久留米郷土研究会、日本野鳥の会福岡支部の4団体がそれぞれの立場で力強い支援を続け、高良山の山林伐採や道路の建設、ゴルフ場の建設などの開発に待ったをかけ、その見直しや中止を求めて運動は続いて行きます。それが杉谷のゴミ処分場反対へと続いていることが会報の中でありありと表現されています。

また、一方で久留米の自然のすばらしさを多くの人に体験してもらい、知ってもらおうと「野草を愉しむ会、探鳥会、観月会、自然と歴史探訪、水辺の自然観察会、キノコと自然観察会」等を開催し、緑の祭典や環境フェアへの協力を一貫して現在まで続けて来たことも、スタッフの報告や参加者の感想文によりその動きをたど

ることができます。

そして、会員による専門分野の解説や自然観察の報告などは、興味津々で付箋紙を付け始めたらきりがなく、自分で索引を作っておこうとさえ思ったほどの文章が満載されています。

#### 3. それから10年

1983年にも特筆すべきことがあります。

まず、十周年記念として小説家・歌人そして「環境権」を生活者の視点から掲げ「中津の自然を守る会」を結成し、環境権の浸透に欠かせない役割を果たしてきた松下竜一氏を迎え、市民図書館視聴覚ホールで「環境権の考え方」と題した講演会が3月に開催されています。

現橋田会長の講演要約から少し引用します。

石垣りんさんの詩に、山を売っては一円もうけ 海を売っては一円もうけ 空を売っては一円もうけ・・・というのがあります。日本の高度成長は、環境を汚染し破壊し何もかもだめにしてしまったのです。小説「豆腐屋の四季」を出版して、もてはやされた私が豊前火力発電所建設反対の旗を振ったとたん、あたかも非国民のような批判を受けました。

裁判では負けはしましたが、不況という経済的側面もあり周防灘開発は阻止されました。

そして、私たちが詩に詠んだ景色は私たちの優しさによって護られました。それは、自分の心で環境を憂えた人たちによってであります。

そういう運動に弾圧がかかるとき、私自身が考え続けたのは、優しさに徹していくことです。それが強さになるという結果が得られたなあと思っています。と結ばれています。

それから、4月には久留米市から「緑の貢献者」として表彰を受けています。これは、今までの当会の活動により、多くの市民が直接自然にふれ、自然に親しむことにより自然保護思想が啓発され、幅広い運動の輪が広がった点を特に高く評価されたことによるものでした。

#### 4. ナチュラルヒストリー

さらに、この年から会報に「自然誌久留米」という連載が始まりました。

その予告の記事には、こうあります。

私達の街は、商都久留米、ゴムの街久留米としてよく知られていますが、誇りに足る美しい風物も数多くあります。身の回りの自然の営みは物言わぬ一木一草、鳥や虫まで、長い生命の歴史を隠しています。それこそが、これから紹介する自然誌なのです。私たちの生活と自然とのつながりを、四季折々の息吹を紙面に溢れさせながら、皆様にお届けします。

スタートは、1983年7月の会報第13号で「イスノキの虫こぶ」「筑後地方のハゼ栽培」「タンポポ戦争～黄色いタンポポに追われるシロバナタンポポ～」の3本です。そして、14年後の会報第57号の47回まで続いています。その後の会報第一面が、これに添った書き方で現在まで続いているのだらうと思いました。

#### 5. タイトルは誰の手で

会報のタイトル「久留米の自然」のデザインは、第1号から12号までは当時幹事をされていた松藤（富士）将和氏の作でした。フリーハンドで字が縁取りされて、そのバックに波形の小さな模様がありました。

そして、10周年を区切りに当時の会長小林実氏の揮毫が採用され、現在に至っているようです。これは、どこにも載っていませんでした。

#### 6. 櫨のうた

ハゼ並木で有名な柳坂曾根の今は故人となられた香月徳男氏の「香櫨亭」そばに、ハゼ樹保護のためのグリーンベルトがあります。

その端に立つ1本のハゼの老樹に寄せる賛歌が誕生したのは、1985年2月のことです。

香月氏にシンガーソングライター向井治英氏から「ハゼの木は残った」という歌を作ったので、録音したテープを差し上げましょうとの電話がありました。

この1本のハゼについては、「残せ」「伐れ」「移せ」と意見が分かれていたそうです。でも、所詮は五分五分の理屈の応酬、そんなときに向井さんのこの歌です。香月さんは、「飛んでいつて、戴きました。」と書いておられます。

さらに、還暦に近い自分には最初は歌にくい感じがしたそうです。ひと晩、繰り返してテープから流れる向井さんのやさしいコトバと曲を聴いて、ロズさんでいるうちに何度も涙ぐんでしまい、そして“ありがとう。ハゼのうたを、向井さん・・・”というような思い出を、会報にとどめてあります。

ここに歌詞を再録します。

ハゼの木が残った

詞・曲・歌唱 向井治英

ハゼの木が残った 道の真中に  
 ハゼの木が一本 道の真中に  
 ハゼの木が残った 道の真中に  
 ハゼの木が百年 耳納おろしの風の中に  
 ありがとうハゼの木 移りゆく時代の中で  
 ハゼの木が一本 まるでお伽話のように  
 ハゼの木が残った 道の真中に  
 ハゼの木が二百年 私たちの暮らしの中に  
 ハゼの木が残った 道の真中に  
 ハゼの木が実をつけた 私たちの心の中に  
 ありがとうハゼの木 喜びと悲しみの中  
 心をもやす炎のような あなたの紅が好きです  
 心をもやす炎のような あなたの紅が好きです  
 あなたの紅が好きです

まだまだ、ご紹介したい記事が山ほどありました。今回は、特に私の気になったことを、独断で書いてみました。

また、機会がございましたら続きを書きたいと思っています。



## 「久留米の自然」100号を迎えて

幹事 角 正博

以前、標本箱設置の提案をしたせいか、本会のこれからに関する事について書けないかと依頼があった。たしかに、将来に向けての活動の展望、次世代を担う会員層の拡大や育成などの課題があると思う。けれども、現在の私にはまだまとまった考えがあるわけではない。しかし、取りあえず、気になることについて書いてみることにした。

古い高良山の植物記録を見る時、現在、ラン類などが見られなくなっていることに驚かされる。シダ植物を調査した時も、現在、10%程度が再確認できなかったと思う。一方、現在では新しい帰化植物が次々と久留米にも進出している。こうした現状の中で毎年記録を残していくことは、地域の自然の移り変わりを後世に残していく上で重要だと思う。この点で、本会の観察会終了時における米田先生の「鳥合わせ」に始まる観察のまとめは、記録として貴重である。しかし、鳥類以外は毎回、リストにして記録が残されていないように思う。しかし、今後は、記録を残していくことが一層重要になってくると思う。

そこで次は、記録の残し方についてである。これは発行物にして残すべきであると思う。したがって、会報のあり方を変えてみてはどうだろうか。幸い、インターネットが普及してきたので、将来的には、会員の感想や雑感などは本会のホームページの中のコーナーに移し、会報は毎回の観察会の観察記録や研究を中心にして、観察会の記録の蓄積を図った方がよいのではないと思う。会報を10年毎に冊子化しているメリットも、さらに生かされると思う。きちんと観察会の記録を残していたら、例えばベニバナボロギクがいつ頃から高良山に侵入してきたのかわかったのではないと思う。しかも昔の記録と比べる時、和名は当てにならないので学名を併記するようになりたい。

第三に、こうした地味な活動にはボランティアの存在が欠かせない。本会で次世代の研究者を育てることは困難であるが、次世代の自然観察のボランティアを育てることは可能ではないかと思う。そこで、本会で分類学や進化、生態学や環境・共生についての基礎について学ぶガイド育成講座を検討できないだろうか。次世代の自然観察のボランティアガイドを育成しなければ、久留米の自然を長い期間にわたって観察し、記録し続けてゆくことはできない。こうした長い年月をかけて集めた植物相の変化や動物相の変化は、何ものにも代え難い、将来の久留米の大きな財産になるはずである。そのためには非営利法人化等の組織・運営のあり方も検討が必要になってくるだろう。とりあえず、本会の活動を(1)調査・研究と(2)自然の不思議さに触れること・生涯にわたる学びの二つを中心的な柱にして、この柱に沿って会報などの発

行物と本会のホームページの役割など、本会の在り方、内容を見直してはどうかと思う。

第四は、本会の強みである自然史や環境という広範な視点を久留米および地域学の中で、どのように生かすかである。久留米の歴史を背後で支える自然史の観点から、久留米の歴史を大きくとらえることができるのが本会である。しかし、久留米の歴史博物館の動きの中に、こうした背景としての生物や地形、環境などを含めた広い視野での地域学の発想はない。こうした視点を広く今後も発信することは久留米学や地域学の上で重要である。そのためには、地道な調査・研究がふだんからなされ、その成果を多くの市民に発信する二つの役割をこれから本会がどのようにして担っていくのが重要になってくると思われる。

以上、思いつくままに要点をまとめてみたが、どうであろうか。



## 久留米周辺の環境変化

副会長 河内 俊英

久留米周辺の自然環境の変化を30~40年間についてみる。伐採の話が出た柳坂のハゼ並木は、今では秋の風物詩として残され、また撤去目前になった朝倉の三連水車も観光の目玉になっており、当会の運動の賜物と言えよう。高良山はゴルフ場計画、世界ツツジ公園計画さらに市のゴミ最終処分場と常に開発にさらされており、処分場は完成してしまった。

高良内には青峰団地ができてから高良川の洪水が多くなり、旧処分場周辺には、大きな産廃処理施設が操業しており、いつ産廃処分場ができるか心配される。平野部では、荒木町・三西化学工場跡地の農薬汚染が新幹線工事で再発見され、今後いかにクリーンに再生できるか注目される。高速インターから南町に続くバイパス工事では永福寺のイチョウや自衛隊のクスノキ並木がうまく残せるかが心配である。

## 人為的関与する自然保護について

副会長 国分 謙一

各地で一部の蝶が少なくなったといわれていて、環境庁のレッドデータブック等にも多くの蝶のリストがあります。草原性といわれる蝶が殆どで、各地の調査報告を見ても同じです。里山といわれる高良山や耳納山等の近郊の山麓に行くと、私は植林地は別ですが植生に人間が手を加えない、また何もしない場所の植生の内部の状態は、縄文時代に戻っているのではないかと考えてなりません。昭和30年代末の中学1~2年頃に、発心山から高良山まで縦走した時は一面のススキ原で、ジャノメチョウが発心山から高良山まで多数生息していましたが、現在は全く見かけませんので久留米市から絶滅したのではないかとも思われます。今は耳納連山の一部に細々と生息していますが、ここは毎年必ず草刈りをされている所で、もし草刈りをしなくなると数年以内に消滅してしまうものと思

われます。このような状況は他の草原性といわれる蝶も同じで、ある程度の面積の草原が必要で、久留米市のような平地では人為的に草原を維持しなければ棲息不可能ではないか、レッドデータブックに記載されている、草原性の蝶は縄文時代は各地で細々と棲息していて、今よりもっと珍しかった蝶ではないかと思えてなりません。江戸時代以前から人間が燃料や肥料として、樹木や草を伐採してきたから草原が広がり生息場所を拡大してきたが、利用しなくなった途端に草原が縮小し減少したのではないのかと思っております。

何もしないのが自然保護と言われている方もおられますが、私は何を対象にしているのかで保護の内容が変わるものと思っております。一面根こそぎにするのは考えものですがある程度人為的関与が必要な場合もありえるのではと思われれます。

ただし、淡水魚等の水域を主な生息とする生物は移動することができないので、水域を何もしない状態が保護につながるのではと思っております。

## 久留米周辺の野鳥の変遷

副会長 米田 豊

私が当会に入会したのは久留米に来て早々で、30年が経過しました。日本野鳥の会福岡支部と当会との関わり歩みについては松藤支部長にお譲りし、私は観察体験を交えて久留米市周辺の野鳥の変遷を書きました。

1983年発行の「郷土くめ自然」では久留米周辺の野鳥は164種記録されています。その後、高良山の定例探鳥会や筑後川の水鳥調査が続く内に追加種も増え、今度当会から発行した「環境教育読本 ひとつの川から見えるもの」では207種記録されています。

変遷としてまず、地域指定の国の天然記念物であるカササギの分布拡大です。来た当初、印象を受けた鳥も今ではあまり目が向かない普通種です。農村部を生息域にしていたムクドリ市の市街地進出もあります。本来は海の岩場付近に生息するイソヒヨドリが内陸部の久留米市街で

も繁殖・定着するようになり、夏鳥のササゴイ、留鳥のハクセキレイが街路樹をめぐらしています。また近年、アオサギ、カワウが増加傾向にあり、ミサゴもよく見られるようになりました。川の水質浄化で魚も復活したため、カワセミも高良川や筒川などでしばしば見られます。なお、高良山では帰化したソウシチョウやガビチョウが幅を利かせています。

これらに反して、かつては医学部キャンパスのエノキ、御井小学校のムクノキなどでも見られていたアオバズクが、市街地の社寺林や公園などに残る巨木から姿を消して行きました。

これまでに私の印象に残った鳥や出来事は、高良大社裏手のスギの巨木でのブッポウソウ、北面遊歩道のヤマモモでのフクロウの子育て、大社でのシロハラ同士の激しい喧嘩、本坊跡での10月のオオルリ、参道沿いでのトラツグミ、放生池でのアカショウビン、善導寺町の筑後川周辺でのカワアイサやマナヅル、宮ノ陣の造成地でのコアジサシの繁殖、医学部キャンパスでのハヤブサの採餌などです。

## 「筑後地域の環境と生物」

### 河内俊英氏講演会より

#### 幹事 福田 万里子

自然は全く手付かずの原生林や、一度人の手が増えられた雑木林(里山)、植林や牧草のための造成地、手を加え続けられる畑や水田などに分けられる。

里山には動植物の種類も多く、有機物など栄養分も多い。昔は薪炭の確保などに重要な所であったが、昭和30年代のエネルギー革命や、化学肥料の普及で価値が無くなり見捨てられてしまった。それどころか宅地造成、ゴルフ場、墓地公園やごみ最終処分場として開発されてしまい、多様な生物の生態系が壊され、さらに環境の汚染源となってしまった所が少ない。

しかし、水田の多面的な機能や森林の環境資源としての公益的機能は高く評価されている。

久留米市やその周辺には一般廃棄物、産業廃棄物の処分場が多く存在し、また荒木駅裏の三西化学・農薬工場跡からは環境基準の95倍のダイオキシンやその他の農薬類が検出された。現在工場跡地や農薬の積み下ろしがあつた駅裏の土壌、周辺の井戸水の検査などが行われているが、ここに限らずごみ焼却炉や処分場、除草剤など残留農薬の化学物質による地下水汚染が

時間を追って広がっていることが明らかになっている。

その他、寺尾谷周辺には希少な生物の宝庫で有ることや日本人のルーツ、大陸との陸続きが長かった西日本には中国大陸や朝鮮半島と類縁性の高い淡水魚の魚類が多く生息し、有明海には太古の置き土産ともいえる魚介類や、世界でもここしかない特産種(エツ、カニ、シラウオ)が存在する、など多岐にわたる問題提起をして頂きました。

## 例会報告

### 第352回例会冬の自然観察会とだご汁会

#### 行徳 直久

久留米市生産流通課と当会との共催で、12月16日高良山四季の森で行われ、参加者はスタッフを含めて11人でした。

高良内幼稚園を九時半過ぎにスタート、林にさしかかるといきなり相思鳥の群れが、きれいな姿と鳴き声を披露してくれました。

スタッフからキノコや木の実、野鳥などの説明を聞きながら森林つつじ公園へ向かう途中、林道脇のオオカグマの葉裏に、翅を広げて越冬しているイシガケチョウを見つけました。

つつじ公園には、暖かいだご汁と銀杏のたっぷり入った味噌飯が橋田会長の肝煎りで準備されていました。昼食後、準備していたカマキリの卵囊やイラガの繭、ミノムシなど「昆虫の冬ごもり」の現物をみんなに見て貰いました。

帰りは菖蒲池の方から下り、イノシシのラッセルのあとや、石の上などにマーキングされたイタチの糞などの説明を受けながら、楽しい一日になりました。

#### 太宰府市 長野 千里

高良山をこの様に歩いたのは始めてで、天気も良く楽しかったです。

素人だけで来たらきつと素通りしていたであろう植物や動物の通った跡など、いろいろ教えていただきとても勉強になりました。

#### 国分町 長崎 文子

お天気に恵まれて暖かなハイキングになりました。自然の中を歩くと日々のストレスなんかちっぽけに感じました。日常なかなか観察できない植物や野鳥、龍のヒゲには鮮やかな青い実がついていて感動しました。健康のためにも機会があれば、また参加したいです。

お世話になりました。ありがとうございました。

**2008年度 久留米の自然を守る会 総会**

[日時] 2008年1月20日(日) 14:00~14:50 [場所] えるピア久留米209号室

**I 2008年度 総会** 司会 副会長 米田豊

1. 開会挨拶 会長 橋田沙弓 2. 議長選出 副会長 河内俊英  
3. 議題

(1) 2007年度 活動報告 事務局 古賀信夫 (2) 2007年度 会計報告 会計 福田万里子

(3) 2007年度 会計監査報告 監査役欠席の為書面による報告

(4) 役員紹介

①会長 橋田沙弓 ②副会長 米田豊・河内俊英・国分謙一

③事務局長 古賀信夫 ④会計 福田万里子

⑤会報編集 橋田沙弓・丸山由紀子・古賀信夫・行徳直久

⑥幹事 山川英毅・今村由子・丸山由紀子・福田万里子・角正博・行徳直久

⑦会計監査 野口勝司・高山美子 ⑧名誉顧問 丹部竹志・森田公造

(5) 2008年度 活動計画 事務局 古賀信夫 (6) 2008年度 予算 会計 福田万里子

4. 閉会挨拶 副会長 河内俊英

**I. 2007年度 活動報告**

(1) 例会・協賛イベント

例会No.	月日	表題・内容	参加者数	スタッフ参加者
340	1月13日(土)	総会 講演会「郷土の植物」 講師 猪上信義	11名	河内 米田 丸山 福田 角 行徳 古賀
		新年会 食彩館 寺町	9名	
341	2月3日(土)	ビデオ鑑賞「昭和10年の筑後川と久留米の人々」講師 山口淳	8名	河内 米田 行徳 古賀
	3月24日(土)	筑後川野草を愉しむ会の事前準備会・野草採集会	雨のため中止	
342	3月25日(日)	筑後川野草を愉しむ会	雨のため中止	
343	4月22日(日)	吉見岳 樹木の名札付けとだご汁会	7名	橋田 角 河内 行徳 猪上
344	5月13日(日)	高良山バードウィーク探鳥会	42名	米田
345	6月9日(土)	ホテルのタベ	24名	橋田 河内 米田 福田 古賀
346	6月24日(日)	キノコ観察会とキノコ汁	12名	橋田 丸山 福田 行徳 古賀
347	7月22日(日)	水辺の自然観察会 講師 橋本哲男		橋田 河内 米田 丸山 山川 古賀
348	9月22日(土)	筑後川観月会 講師 吉田哲麿 マトリョーシカ		橋田 米田 国分 丸山 今村 行徳 古賀
349	10月14日(日)	ネイチャーゲームと自然観察会	30名	橋田 米田 丸山 角 行徳 古賀
350	11月11日(日)	バードウォッチングウィーク探鳥会	22名	橋田 米田 丸山 行徳 古賀
351	11月18日(日)	キノコ観察会とキノコ汁会	26名	橋田 米田 行徳 角 古賀
352	12月16日(日)	冬の自然観察会とだご汁会	8名	橋田 米田 行徳 角 古賀

協賛	4月14日(土)	高良山 ゴミ清掃と記念植樹ボランティア活動	橋田 米田 猪上 行徳 角
協賛	5月5日(土)	チビッコ天国 木のおもちやづくり	松藤夫妻 亀井 橋田
	6月3日(日)	環境フェア 木のおもちやづくり	松藤夫妻 亀井 橋田 行徳
協賛	11月23日(火)	緑のハイキング 昆虫、野鳥、植物の講師担当	橋田 米田 角 行徳 猪上

協賛	7月～8月4回	高良川キッズ探検隊 昆虫、魚類、植物班 担当講師	橋田 米田 行徳
参加	11月3日(土)	J C主催「久留米の中心から元気を発信するパイ」	橋田 米田 河内 角 行徳 古賀 今村 荒巻

## (3) 会報

	(発行日)	(ページ)	(表紙)	(文)	(写真)
第96号	2007年4月1日	8ページ	高良山の山並みとシイ林	猪上信義	行徳直久
第97号	2007年7月1日	8ページ	タゴガエルの成体と卵塊	丸山由紀子	行徳直久
第98号	2007年10月1日	8ページ	ベニツチカメムシ	行徳直久	行徳直久
第99号	2008年1月1日	8ページ	ひとつの川から見えるもの	米田豊	古賀信夫

## (4) 会員状況(2008. 1. 1現在)(2007年1. 1. 会員数88名)

①会員数 82名 ②新入会者 0名 ③退会者 6名

## II. 2008年度 活動計画

例会No.	月日	表題・内容	場所	担当
353	1月20日	総会・講演会 講師河内俊英氏 新年会・家庭料理さつき	えーるピア久留米2階	事務局、幹事全員
354	2月9日	歴史講演会 講師山口淳	久留米市役所3階	事務局、幹事全員
355	3月30日	筑後川春の野草を愉しむ会	くるめウス	事務局、幹事全員
356	4月29日	高良山樹木の名札付け会とだご汁会	南周り遊歩道	事務局、河内、猪上、 行徳、橋田
357	5月11日	高良山バードウェイク探鳥会 共催日本野鳥の会筑後支部	高良山四季の森	事務局、幹事全員
358	6月7日	ホテルの夕べ	高良内校区公民館	事務局、幹事全員
359	6月29日	高良台キノコ観察会とキノコ汁会	高良台	事務局、幹事全員
360	7月20日	水辺の自然観察会(高良川)	くるめウス	事務局、幹事全員
361	9月13日	筑後川観月会	くるめウス	事務局、幹事全員
362	10月12日	高良山バードウォッチングウィーク探鳥会	高良山四季の森	事務局、幹事全員
363	11月9日	ネイチャーゲームと自然観察会	高良山四季の森	事務局、幹事全員
364	11月30日	高良山キノコ観察会とキノコ汁会	高良山四季の森	事務局、幹事全員
365	12月14日	冬の自然観察会とだご汁会	高良山四季の森	事務局、幹事全員

協賛	5月5日 6月1日	木のおもちづくり 木のおもちづくり	鳥類センター 百年公園	松富士夫妻、行徳 橋田、亀井
協賛	7月～8月4回	高良川キッズ探検隊	くるめウス 高良川	米田、行徳、橋田
協賛	11月23日	緑のハイキング講師	高良山 兜山キャンプ場	米田、猪上、角、行徳、 橋田
共催	未定	環境シンポジウム	未定	

## 久留米の自然を守る会 2007年度決算書

## ☆収入

1、前期繰越	
(現金=55,151、預金=438,035)	
	493,176 円
2、実収入	347,422 円
①会費	
(現金=68,000、振込=106,000)	174,000
2005年分(2人) = 4,000	
2006年分(10人) = 20,000	
2007年分(69人) = 138,000	
2008年分(6人) = 12,000	
②例会・行事費	27,900
③カンパ他(利子713円含む)	147,522
収入合計	840,598 円

## ☆収入

1、会報作成(印刷・プリンティングコガ、編集・古賀信夫)	153,975 円
#96号(07.4.1) = 36,000	
#96号(07.7.1) = 38,100	
#97号(07.10.1) = 38,100	
#98号(08.1.1) = 41,775	
2、通信費	27,200 円
3、印刷・コピー費(会報以外)	2,715 円
4、行事費	31,740 円
5、文具費	29,458 円
6、事務局費	20,540 円
7、予備費(会長入院見舞、出版事業)	305,000 円

支出合計	570,628 円
------	-----------

## ☆残高

1、現金	20,222 円
2、預金	240,748 円
残高合計	269,970 円

上記のとおり相違ありません。

2008年1月16日 野口 勝司

## 久留米の自然を守る会 2008年度 予算書

## ☆収入

1、前年度繰越	269,970 円
2、会費(80×@2,000)	160,000 円
3、例会参加費	30,000 円
4、カンパ他	140,030 円
収入合計	600,000 円

## ☆支出

1、会報作成費(4×@40,000)	160,000 円
2、通信費	30,000 円
3、印刷・コピー	3,000 円
4、行事費	30,000 円
5、文具費	5,000 円
6、事務局費	20,000 円
7、予備費	352,000 円
支出合計	600,000 円

☆ 予備費より、300,000円を環境教育読本「ひとつの川から見えるもの」の出版に充てたい。また、その出版費用については別会計にする。

## お詫びと訂正

久留米の自然99号6ページの「高良川流域のキノコ(その5)」の下記写真で、クロコブタケと なっていますが、マメザヤタケの間違いでした。訂正してお詫びいたします。



マメザヤタケ

## 《行事案内》

## ◇ 第356回例会:

## 高良山樹木の名札付けとだご汁会

みなさんで樹木の名札を付けてみませんか。だご汁も味わえます。北周り遊歩道を歩きながら、樹木に木札で名前をつけていきます。昼食は森林公園にてだご汁をいただきます。

〔日 時〕: 4月29日(火・昭和の日) 雨天中止

〔集合・解散〕: 9:30・14:30 御井小学校前

〔参加費〕: 200円 先着20名様

〔持ち物〕: マイカップ はし

## ◇ 第357回例会:

## 高良山バードウィーク探鳥会

高良山四季の森として整備された竹の子コースや環境保全林の新緑の中で、オオルリやキビタキなどの美しいさえずりを楽しみませんか。

〔日 時〕: 5月11日(日) 雨天中止

〔集合・解散〕: 9:30・14:30 高良内幼稚園駐車場

〔持ち物〕: 弁当、水筒、筆記用具、帽子、あれば  
双眼鏡

〔参加費〕: 100円

〔共 催〕: 日本野鳥の会筑後支部

## ◇ 第358回例会:

## ホタルのタベ

高良内公民館でホタルの話聞いた後、高良川上流までホタルの見学に出かけます。

〔日 時〕: 6月7日(土) 雨天中止

〔集合・解散〕: 19:00・20:00 高良内校区公民館

〔参加費〕 100円

## ◇ 第359回例会:

## 高良台きのご観察会ときのご汁会

高良台演習場できのごを中心自然観察会を行います。指導は金子周平先生です。その後、上津温水プール2階できのごと同定ときのご汁を味わいます。

〔日 時〕: 6月29日(日) 小雨決行

〔集合・解散〕: 上津小学校運動場横 10時

14時半温水プールで解散

〔持 物〕: 筆記用具、長袖、長ズボン、長靴

〔参加費〕: 300円 先着20名様

## 《事務局だより》

紙幅の関係で事務局だよりはお休みです。

「久留米の自然を守る会」ホームページ

<http://kurumenoshizen.net>

ホームページを新しく作り直しています。閲覧者が書き込める箇所を増やしていますので、どんどんアクセスしてください。

## 1. 会員消息 入会 青柳浩子(久留米市)

## 2. 会費納入について

会費は、会の活動を支える源です。まだ、会費を納入していない人は振替用紙(口座番号01750-1-40114)に年会費2000円をご確認のうえ納入をお願いします。

## 3. 原稿募集

次号101号は平成20年7月1日発行予定です。原稿の〆切は6月1日です。皆さんの原稿をお待ちします。

## 4. 幹事会のご案内

幹事会(定例)は原則として毎月第1水曜日の19:00~21:00まで、西町教育集会所で行います。皆さんも気軽にご参加下さい。(4月2日、5月7日、6月4日、7月2日)

## 久留米の自然

平成20年4月1日 第100号

発行 久留米の自然を守る会

発行者 橋田沙弓

事務局 〒839-0827

久留米市山本町豊田2320-6

TEL 46-8622 FAX 46-8623 (古賀)

印刷 (有) プリンティング コガ

TEL 0944-88-0027 FAX 0944-88-0029